第17回　山陰本線丹波口で下車して

■ 平安京朱雀大路の碑

ＪＲ山陰本線は、今は嵯峨野線（園部まで）という愛称で呼ばれています。路線をみると、京都駅から梅小路のあたりで北へ曲がり、丹波口、二条を経て、ほとんど真北に向かって走っています。円町（新設）の手前でほぼ直角に曲がり、西進して、花園、太秦、嵯峨嵐山（旧嵯峨）を経て、亀岡に向かいます。北上する直線の部分は、千本通（平安京の朱雀（すざく）大路）に沿っています。なぜ、このような経路をとったのでしょうか

当時の地図をみると、この線路は、開通当時（明治三十年〔一八九七年〕）の京都市街の外縁に沿って敷設されていることがわかります。たとえば、国際日本文化センターの画像データ「京都市街全図」（明治四十年）http://tois.nichibun.ac.jp/chizu/santoshi_2325.html をご覧ください。このデータベースにあるほかの地図も参照しますと、丹波口から壬生あたりまでは、残った御土居の内側（市街側）に沿って走っていることがわかります。山陰本線開通時には、平安京の左京が市街地（今回述べるように、一部は畑地）で、平安京の右京が田園化していたことを示しています

今回は、京都駅から山陰本線で丹波口までゆきましょう。丹波口で降り、五条通にでたところが、千本五条の交差点。五条通を東に。一筋めを南に向かうと、中央青果卸売市場に突き当たります。この突き当たったあたり、中央卸売市場の北壁に沿った植え込みの中に、「平安京朱雀大路跡」の碑があります。朱雀大路の東側の遺構が、この碑の地点で発掘されたことを記念して設置されました。

写真の碑文をディジタル文書にしたものが、フィールド・ミュージアム京都（http://www.city.kyoto.jp/somu/rekishi/fm/）いしぶみデータベースから入手できますので、次に引用しましょう。

仁丹町名看板の所在（丹波口駅東側）

平安京朱雀大路の碑　　中堂寺児童公園

平安京朱雀大路跡

朱雀大路は、平安京の朱雀門から南へ羅城門まで、平安京の中心を南北約4kmにわたって走る主要大路である。道路の幅は28丈（約84m）をはかり、両側には溝、犬走、垣が設けられ、さらに柳の並木がこの大路に色どりを添えていたといわれる。朱雀大路の両わきには、貴族の邸宅や役所の建物などがたちならび、迎賓館としての東、西鴻臚館や天皇家別邸である朱雀院などもそこに建てられていた。

この大規模な道路も、平安後期ごろから無用の長物と化して、鎌倉以後、急速にその機能を失い、荒廃していった。この朱雀大路の痕跡をとどめるのが、現在の千本通りである。

現在地は昭和50年夏、秋の発掘調査によって、朱雀大路の一角が発見された地点である。ここでは、平安京楊梅小路と朱雀大路の交差点を中心に、朱雀大路東側溝が延長120mにわたって検出され、はじめて朱雀大路の正確な位置が確認されたのである。

昭和53年9月1日　京都市

この石碑のある東西の通りが、平安京の楊梅小路（やまももこうじ）。現在は、このあたりでは、中堂寺通と呼ばれています。道を隔てた向かい側には、「中堂寺児童公園」。この児童公園の東かどを北へ曲がると、坊城（ぼうじょう）通の東側に「新選組記念館」（坊城通五条下ル中堂寺壬生川町）があります。手書きの幟がなければ見落としてしまう町家です。残念ながら、入館する機会はまだありませんが、インターネットの口コミではいろいろとおもしろいコレクションがありそうなので、機会をみてぜひとも訪問したいと考えております。

坊城通の一筋東の通りと中堂寺通の十字路の西北かどに、町名看板「中堂寺壬生川町」①があります。町名だけのそっけない看板。基準の十字路を特定するのが面倒だったのでしょうか。

さらに、中堂寺通を東に進んだところ、南側にもう一枚、「中堂寺鍵田町中堂寺通坊城西入」②。今度は、町名が先で、基準の十字路の指定があとにくる形式。撮影の都合上、最後尾の「西入」が途切れてしまいましたが、郵便受の横手から読み取れます。

中堂寺壬生川町①

中堂寺鍵田町中堂寺通　坊城　西入②

貼ってある位置から考えて、「西入」はどうもおかしい。初めは、もともと別のところへ貼ってあったのを、現在のところに移した可能性もあるかと思いました。しかし、この「西入」はどう考えても、「東入」のまちがい。地図を調べてみますと、中堂寺鍵田町には坊城通より西の部分はありません。

さらに中堂寺通と壬生川通の交差点まで歩くと、北西のかどの煙草屋の下部に、「中堂寺壬生川町」③。これは、①とおなじく、町名だけのそっけない看板。

中堂寺壬生川町③

■　由来不詳のまま、二五〇年以上続く福神社

壬生川通にでたところで、東側に「福神社」（壬生川通五条下ル中堂寺前田町）。祭神は紀貫之だといわれていますが、はっきりしません。『拾遺都名所図会』巻一に勧持院にある「福大明神社」の祭神が紀貫之であると載っているので、これからの類推かも知れない。別に葭屋町一条にも「福大明神社」があり、こちらの祭神は稲荷明神であると『拾遺都名所図会』巻一に記載されています。要するに、壬生川通五条下ルの「福神社」の祭神はよくわかりません。

由来はよくわからないけれども、古いのは古い。なにしろ、『都名所図会』巻二に、「福大明神森」の項目があり、「壬生通の東楊梅の北にあり、由来詳ならず」と記載されています。同様の記

福神社

載が、『山城名跡巡行志』第一にもあり、「福大明神森」を次のように漢文で説明してあります。

在二壬生通一東、楊梅北一。由来不レ知。塚有レ霊。歓喜光寺四至文云、楊梅壬生福大明神傍。即此。

僧浄慧『山城名跡巡行志』、宝暦四年〔一七五四年〕
『新修京都叢書第十巻 山城名跡巡行志・京町鑑』
光彩社、一九六八

■八条の怪

福神社から壬生川通を南下して、丹波口通との十字路を西に戻ります。丹波口通と坊城通から一筋東の通り（この通りの名前はわかりませんが、強いていえば、島原大門の前の通りの延長になりますので、「大門通」と呼んでよいかもしれません）の十字路（変形、かなりずれています）の東北のかどに、町名看板「中堂寺鍵田町」④があります。

中堂寺鍵田町（ちゅうどうじかぎたちょう）④

この十字路から、すこし南下しますと小坂公園の入口（裏口）手前に、町名看板「八條小坂町」⑤があります。「あれれ、ここは六条あたりになるはずなのに。なぜ「八條小坂町」なのだろう」という当然の疑問（「八条の怪」とはおおげさですが）がわきます。

この理由は、明治期まで、鍵田町は中堂寺村、小坂町は八条村に属していたことによります。したがって、町名看板④と町名看板⑤の間が、中堂寺村と八条村の境界であるということになります。花屋町通にも、八条村の痕跡があります。それは、町名看板「八條二人司町花屋町通櫛笥西入」⑥。ここにも「八條」が

小坂公園

八條小坂町⑤

先頭に書いてあります。

町名の「二人司」は、このあたりが、かっては「大字八条小字二人塚」と呼ばれていたことの名残です。このことは、次回に詳しく触れることにしましょう。

町名看板⑤から⑥へゆく途中に和菓子屋が二軒。島原大門（次回で紹介します）の交番の前を曲がって、花屋町通を東へ、北側二軒目に「三昇堂小倉」（花屋町通壬生川西入薬園町）があります。創業は昭和十三年〔一九三八年〕。名物は、生麩餅。その斜め向かいに、手焼きおかきの「菱屋」（花屋町通壬生川西入薬園町）。明治十九年〔一八八六年〕創業。ごくごく薄いうすばね、大判おかき銀角など。さらに、町名看板⑥の過ぎた北側にも和菓子屋が一軒。「伊藤軒老舗」（花屋町通櫛笥西入薬園町）。創業は昭和初め。麩もち、葛まんじゅうなど。共通の町名「薬園町」も旧八条村に属していました。町名「薬園町」の由来は、平安京の東鴻臚館であったこのあたりが、のちに典薬寮の薬園になったことに由来しています。

八條二人司町　花屋町通　櫛笥　西入⑥

町名看板⑥の手前、北側に路地があって、この路地の奥、曲がりかどのところに「初栄稲荷神社」があります。扁額には、初栄大神とありますが、狐が両側にいますので、稲荷神社。この地域の鎮守のようですが、手入れされていないようで残念です。

■　住吉神社

もう一度、壬生川通を北上して、中堂寺通へ戻りましょう。壬生川中堂寺の交差点を東に折れて、中堂寺通を東に進みます。

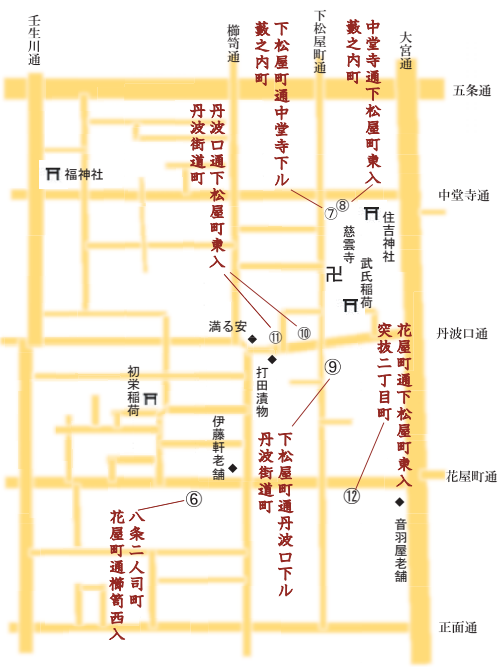
初栄稲荷神社

東一筋目が櫛笥通、二筋目が下松屋町通。中堂寺通と下松屋通の十字路の東南のかどに直角に二枚の町名看板が貼ってあります。「下松屋町通中堂寺下ル藪之内町」⑦と「中堂寺通下松屋町東入藪之内町」⑧です。この二枚は、原則どおり、基準の十字路が先頭で、町名が末尾にきています。目を凝らして見ると、「藪」は簡字体「薮」となっているようですが、ここは小さい文字が書きにくかったためだろうということで、旧字体にしておきます。

この下松屋町通は、江戸時代は、一貫町通と呼ばれていました。『京町鑑』では、「一貫町通」の項は、「松屋町通」の項の次に説明されており、次のように記載されています。

此通一貫町と名付たる事詳ならず。

此通は松原より南は丹波口下ル所迄の通にて、大宮の西



仁丹町名看板の所在（五条大宮の西南地域）

の通也。凡北にて松屋町通にあたるゆへ茲に附す。

白露『京町鑑』、宝暦十二年〔一七六二年〕

『新修京都叢書第十巻　山城名跡巡行志・京町鑑』

光彩社、一九六八

現在の地図をみますと、この記載のとおり、はるか北（二条城以北）に、大宮通の一筋西に松屋町通があります。これから、下松屋町通と称すようになったと推定されます。

中堂寺通が大宮通と交叉するすぐ前に、「住吉神社」（中堂寺通大宮西入藪之内町）があります。町名は、町名看板⑦⑧と同じ

下松屋町通　中堂寺　下ル　藪之内町⑦

中堂寺通　下松屋町　東入　藪之内町⑧

二枚の看板⑦と⑧の出現状況

藪之内町。

住吉神社

「住吉神社由緒」と題した駒札が立っていますので引用しましょう。箇条書にしてあり、簡潔かつ要点を衝いています。

住吉神社由緒（駒札）

創　建　延暦年中〔七八三～八〇六〕と伝えられる

再　興　保延四年〔一一三八〕

再　再　興　天正十九年〔一五九一　約四〇〇年前〕

御　祭　神　表筒男命　中筒男命　底筒男命

御神徳　災難・病魔を除き、夫婦円満・敬愛の御神徳極めて篤く、旅行渡海の諸難を救い給う霊験あらたかなり。

祭事

例祭　九月第四金曜日・土曜日・日曜日の三日間

剣鉾祭　松鉾・牡丹鉾・菊鉾　三基

氏子区内の町内にて持ち回りで飾付を奉仕

大小神輿区内巡行

女子神輿鉾当番町におねり

無形文化財「中堂寺六斎」奉納

区内安全祈願祭　一月第一日曜日

節分祭　二月三日

月次祭　毎月一日

境内社　金比羅宮　稲荷神社　神明神社

天満宮社　道祖神社　貫之神社

鎮座地　京都市下京区中堂寺通大宮西入る

例祭の「剣鉾祭」というのがハイライトです。鉾といえば、祇園祭の長刀鉾など、のちに長大化したものを思い浮かべますが、住吉神社の鉾は、祭に供する鉾の原型をとどめたものです。それでも、松鉾・牡丹鉾・菊鉾のそれぞれに応じて、装飾を施した豪華な作りです。氏子区内とは、だいたい下松屋通を挟む松原通〜正面通までの地域です。祭礼中日の夜に奉納される「中堂寺六斎」は、重要無形文化財。

『山城名跡巡行志』第一には、「住吉ノ社」の項があり、次の説明が記載されています。

在中道寺村。門北向。鳥居社東向。鎮座記不レ詳。例祭六月二十八日。神輿一基。近来島原町為二産沙神一旅社立二彼地一以二二十三日一神輿移二此所一島原旧松尾氏子也

「門は北向き、鳥居と社は東向き」の記載が、現在もそのままであることは、添付した写真からわかります。

『都名所図会』には、「住吉社」として、

大宮中道寺にあり、祭る所攝州住吉の勧請なり。此ほとり又島原傾城町の産沙神とす。祭は六月廿八日なり。

と記載されています。そういえば、駒札にある祭神の三柱は、大阪の住吉大社と同じです。

■ 丹波街道

中堂寺通の一筋南の東西の通りを、丹波口通といいます。手許の地図をみると大宮通から丹波口通に入りますと、すぐ北側に路地があって、その奥には「武氏大明神」（丹波口通大宮西入上ル丹波街道町）が祭られているように読み取れます。現在は、道路に面したお宅が取り壊されて、駐車場になっていて、社殿が表通りから見通せるようになっています。祭神は稲荷神。

丹波口通と下松屋通の十字路の北には、慈雲寺（下松屋町通中堂寺下ル薮之内町）。山門向かって左に「開運厄除申洛陽十二支妙見」の門札が架っています。妙見大菩薩は、北極星を中心とする北斗七星を神格化したもの。十二支に京都市内の妙見菩薩を祀る

武氏稲荷

寺院（主として日蓮宗）が割り当てられており、これらをめぐると運気が充実するという信仰が、江戸中期からありました。一時期（かなり長い間？）中断していましたが、三十年ほど前に復活し今日まで続いています。この慈雲寺は、通称「島原の妙見さん」。申（さる）にあてられています。

もとの丹波口通と下松屋通の十字路に戻って、南には、町名看板「下松屋町通丹波口下ル丹波街道町」⑨ があります。

さらに、丹波口通を西に進みまと、北側のお宅に町名看板「丹波口通下松屋町西入丹波街道町」⑩ が貼ってあります。道路側に正面ではなく、建物の出張ったところに東向きに貼ってあるので、気を付けていないと見落としてしまいます。すこし西側に北へ入る路地がありますが、西側の二階に、同じ基準同じ町名の看板「丹波口通下松屋町西入丹波街道町」⑪ が貼ってあります。町名看板⑪の斜（はす）向かいに「打田漬物」の本店。創業は昭和十五年〔一九四〇年〕。公式の所在地は、丹波口通大宮西入となっていますが、⑪と同じ町内です。錦小路にも支店がありますので、こちらが県外のものにはなじみがあります。

慈雲寺（洛陽十二支妙見申）

さらに西へ進むと、櫛笥通に出ますが、この十字路が極めて変則的な形をしています。とくに東北のかどにある料亭「満る安」のところ。そういえば、丹波口通も直線ではなく、少しずつ曲

下松屋町通　丹波口　下ル　丹波街道町⑨

がっていることがわかります。これは、かっての丹波街道の名残です。丹波街道は、ここから南へ進んで、御土居の七条通（現在の千本七条あたり）にあった丹波口までつながっていました。その途中は、畑地の中の街道で、正確な位置はよくわかりません。おそらく現在の丹波口櫛笥から櫛笥通を進んで、正面通のところで、西南方向に向きを変えて、丹波口まで至ったのではないかと推測されます。

■　丹波口通は、島原への道

江戸時代、藤本箕山〔一六二八～一七〇四〕が『色道大鏡』を書いて、島原の様子を活写した頃には、京都市街から島原傾城町にゆくには、この丹波街道（丹波口通と櫛笥通に相当）を使っていました。丹波街道を、現在の正面櫛笥まで、さらに西に進んで島原遊廓の南端に至り、ここから衣紋の馬場（遊廓東の長塀に沿ったところ）を北上して、遊廓の東北に開いた大門に至るという道筋です。これは、『色道大鏡』の「坤郭野徑之圖」に「古道」として記載されている道筋です（「坤郭」とは京都の未申の方角

丹波口通　下松屋町　西入　丹波街道町⑩

丹波口通　下松屋町　西入　丹波街道町⑪

にあった遊廓の意で、すなわち島原遊廓のこと。藤本箕山『色道大鏡』巻第十二・遊郭図上。翻刻版、新版色道大鏡刊行会編、八木書店、二〇〇六、三五〇ページ）。この図には、すでに花屋町通に相当するところに道が描かれているので、「古道」のかわりに、現在の花屋町櫛笥までゆき、花屋町通を西へ進んで、島原の大門に至るという道筋をとっていたとも読み取れます。

藤本箕山『色道大鏡』は、島原で遊ぶための手順の概略がわかるという点でも、奇書という名に恥じない。同書には、上述の「坤郭野徑之圖」とともに、「丹波口茶屋町之圖（松原通より四町下大宮通西へ入町）」が載せられています（『色道大鏡』翻刻版、三四九ページ）。この図には、丹波街道町（『色道大鏡』では「街」の字が「海」になっています）の通り（今の丹波口通）を挟んで、南北に茶屋

が並んでいる様子が描かれています。説明には、「丹波海道町朱書の分茶屋なり此茶屋客の送り迎ひをする」と記載されていますので、丹波街道町に並んでいるのは、島原の茶屋の出張所というべきもの。島原で遊ぶ場合は、馴染みの茶屋の出張所にまず上がり、そこから送迎されていたことがわかります。茶屋で焼印入りの編笠をもらい、それを被って島原に向かいます。この図では、西のはずれに「西の門也。町の出はなれ。これより野道なり」とありますから、丹波街道はここからは畑地あるいは田圃の中の道だったことがわかります。遊興果てて帰るときは、暗闇の畦道で非現実から現実に戻るギアチェンジをおこなったのかもしれない。

この図には、現在の下松屋町通について注記があり、「是一貫町の末也。此道昔はなし。寛文十年庚戌六月より此新道あきたり。此上ル町にも茶屋共〻これあり」と説明されています。寛文十年は、一六七〇年です。この記載は、上で引用した『京町鑑』〔一七六二年刊行〕の「一貫町通」の記述とも合致します。さらに、『色道大鏡』の図には、「是より南へ下ル二町の間をあたらし町といふ」と記載されています。現在の町名でいうと、「突抜一丁目」と「突抜二丁目」。町名の「突抜」はどこを突き抜けたかというと、西本願寺の寺内（あるいは東寺領であったかもしれない）であろうと推測されます。この記載によって、この二町が一六七〇年に開かれたことが特定できるわけです。現在の下松屋町通は、ここで突き当たり。正面通、平安高校の北です。ちなみに、平安高校は竜谷大学付属で、西本願寺の傘下にあります。

折角ここまで来ましたから、この近辺の町名看板「花屋町通下松屋町東入突抜二丁目」⑫を紹介します。町名は、「突抜二丁目」で、『色道大鏡』にいう「あたらし町」です。花屋町通を東に、大宮通へ出るとそこは島原口のバス停。ここから島原大門までは、島原商店街と呼ばれています。花屋町大宮の丁字路の南に、本シリーズ14回の「松風」の節で紹介した和菓子屋「音羽屋老舗」。

花屋町通（はなやちょうどおり）下松屋町（しもまつやまち）　東入（ひがしいる）　突抜二丁目（つきぬけにちょうめ）⑫

プロフィール

藤田眞作〔ふじたしんさく〕。一九四四年〔昭和十九年〕北九州市生まれ。学生・大学助手として、十年間、京都で生活。工学博士を取得後、二十五年間、富士写真フイルム（株）足柄研究所にて、記録材料用の有機化合物の開発に従事。次の十年間は、京都工芸繊維大学教授として、有機合成化学・情報材料化学・化学情報学・数理化学の研究教育に従事。そのかたわら和菓子をもとめて京都市内を徘徊し、仁丹の町名看板に興味をもつ。二〇〇七年より、湘南情報数理化学研究所 (http://xymtex.com) を主宰。

「仁丹の町名看板をよすがに京めぐり」（第17回）2008/09/30
公開版 2010/02/12
© 2007, 2008, 2010 藤田眞作 http://xymtex.com